



第 132 号

発 行 者
東筑摩塩尻教育会
編 集 者
会誌会報委員会

「らしく学び らしく生きる」

東筑摩塩尻校長 村上 啓



中学校一校、小学校一校を経験してから三校目に養護学校に赴任した。向き合いう子どもたちの年齢が違うのはもちろんだが、地域や学校規模によってもそれぞれの学校には大きな違いがあった。前任校で身につけてきたことが通用しないことも多かった。学校種によって学校文化が違う。何もできない自分に直面しながら、まずはその学校の特色と子どもたちを受け入れることから始めた。失敗する

ことも多かったが、やりながら仕事を覚えた。尋ねれば教えてもらおうこともできた。今思えば若さの特権だったのかもしれないし、失敗を許してもらえる時代でもあった。

養護学校に赴任し、A君を担当した。A君は歩行や食事に介助が必要だった。移動するときは常に手を引いて一緒に歩いた。生活単元学習という言葉も知らずに養護学校に赴任したので、子どもの実態把握の仕方や授業の発想・構想の仕方など、授業のイロハから教わった。今までの小・中学校での経験はほとんど役に立たなかった。これまで教師主導の「させる授業」をどのくらいやってきたかを痛感させられた。子どもたちの興味・関心・意欲から活動を考え、確かな目当てと見通しをもちながら、主体的な活動が繰り返されるように単元を構成し、授業展開を考えた。働き方改革の時代に大き

な声では言えないが、空が明るくなるまでかけて書いた指導案が朱で訂正され真っ赤になることも当たり前だった。

運動会の練習のとき、少しでも早く走れるようにA君の手を引つ張って走った。A君も必死の形相で走った。練習の後、何人もの先輩から厳しい言葉が飛んできた。「競走じゃない。無理矢理引つ張ってどうするんだ」「A君の走りを大切にしろんだ」「練習を見ていたお母さんが校庭の隅で泣いていたぞ」徒競走は少しでも早く走るものという自分の中の当たり前の価値観がガラガラと音をたてて崩れた。A君は言葉を持たなかった。子どもの実態を把握するとき、今までは「こう話した、こう書いた」というように言葉から捉えることがほとんどだった。先輩からは表情や身体の動き、主体的・意欲的に取り組んでいる姿から見取ることを教わった。また「目を細めて、うれしそうに笑った」と授業記録に書いた時「うれしそうに」は主観的考察の部分だという指摘を受けた。主観的な見方を排除し徹底して客観的に見ることの大切さも教わった。

そんな毎日を繰り返しながら、一年が終わろうとしていたが、私にはA君の成長を感じ取ることができなかった。そのことを同じクラスの担任をしている先輩に話すと「村上さんが一生懸命に給食を食べさせたから、A君は身長も体重も順調に増えた。一番の育ちだと思えよ」と言われた。娘が生まれてちょうど一歳になる頃だったので、その言葉の意味はすぐに分かった。教えることと、その結果

ばかりに頭がいついて、今まで「育つ」という視点が自分にはなかったことに改めて気づかされた。

担任をした三年間にA君と数多くの絵を描いた。私が手を添えて筆を持たせると、A君は心のおもむくままに手を動かして筆を動かすようになっていった。彼によって紡ぎ出される現代アートのような色と形は、彼の命の鼓動であり、生きる証になっていった。彼の造形活動に対して、そんな思いがもてるようになっていった頃から、一緒に居ること、共に在ることの大切さも感じられるようになっていった。気づくとA君との日々が自分にとっての当たり前の生活になっていった。

四十年近い教員生活の中で、今までにA君を含め、何百、何千の子どもたちと出会い、生活を共にしてきた。子どもたちとの関わりの中で、私の価値観は変わり、私にとっての新たな生活が生まれていった。教師としての使命と責任を感じながら、子どもたちと喜怒哀楽を共にすること、数え切れないくらいの感動をもらってきた。

「らしく学び らしく生きる」は、塩筑教育でこれからも大切に受け継いでいきたい手塚縫蔵の言葉である。時代が変わっても、一人一人の子どもを主役にした学校を、これからも創り出していきたい。学校は常に、一人一人の子どもと教師が光り輝く場でありたいと思う。

(広陵中学校)